

終助詞「な」と「ね」の意味・用法の違いについて

森 山 新

韓國日本學會

日本學報 第41輯 別刷

1998. 11

終助詞「な」と「ね」の意味・用法の違いについて

森山 新*

● 目次 ●

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 4. 「な」と「ね」の意味・用法の違い |
| 2. 先行研究 | 4.1. 聞き手めあての程度の違い |
| 3. 「な」と「ね」の意味・用法 | 4.2. 気配りや丁寧さの違い |
| 3.1. 「な」と「ね」の意味 | 5. まとめ |
| 3.2. 「な」と「ね」の3つの用法 | |

1. はじめに

最近、モダリティの研究がさかんに行われ、その中で終助詞「ね」の研究は、益岡(1991)、神尾(1990)、佐治(1991)、金水(1993)など、様々な角度から進められてきた。その一方で終助詞「な」についての研究は、残念ながら筆者の知る限りあまりない。また終助詞「な」について言及がなされている論文においても、「な」は「ね」と同類のものとして扱われることが多くその違いについての研究はあまりなされてこなかった。¹⁾

確かに例文(1)、(2)のように交換が可能な「な」と「ね」が多いことは確かである。

- (1) 君もやってくれる(だろう)な。
 (2) 君もやってくれる(だろう)ね。

ところがこのように置き換え可能な「な」と「ね」は多いものの、両者に若干の意味・用法の違いがあることは明らかである。また例文(3)と(4)のように置き換えが不可能なものも少なくない。

* 世宗大学校 日語日文学科 専任講師, 日本語教育

1) 佐治(1991)によれば、〈ね・な〉は〈よ・や・え・い〉〈さ〉とともに第1類の終助詞とされている。これらは間投助詞としても用いられるもので、この類の終助詞が表す話し手の態度は「文の最初からでも表しうるものであって、聞き手に対する直接的な態度である。」(p.19)という。また〈ね・な〉は尋ねかける気持ちで使われ、話し手の聞き手に対する「問いかけ、同意を求める気持ち」または「尋ねかけ、念を押す気持ち(ことによって、相手に同意、共感をうながす気持ち)」を表すとしている。また神尾(1990)では、「情報のなわばり理論」において、終助詞「ね」は重要なものとして位置づけられているが、そこにおいて「な」は「ねえ」とともに、「ね」の変異形(pp.26-32)として処理され、その違いについての言及はない。

- (3) そんなこと、するなよな。
 (4) *そんなこと、するなよね。

(3)では禁止命令の「な」と文最後尾の終助詞「な」とが相克することはないが、(4)*では、禁止の「な」は文最後尾の終助詞「ね」と相克し、すわりの悪い文となっている。

詳しくは森山新(1998)を参照願いたいだが、このように「な」と「ね」には、性差や地域差に基づいた用法の違いをはじめとして、聞き手をめあてて発話が行われているかどうかや、聞き手に対する丁寧さの違いなど、さまざまな面において用法に違いがある。

本稿では森山新(1998)の研究に引き続き、終助詞「な」の意味・用法の分析を進めていくが、特に今回は調査対象を広げ、具体的使用例をさらに集めるとともに、終助詞「な」を「ね」との比較の中で調査・分析し、両者の意味や用法の違いが根本的にどこにあるのかを明らかにしていきたいと思っている。

2. 先行研究

マグロイン・花岡(1997)によれば、「よ」は話し手の判断を聞き手に主張する機能があり、「ね」は話し手が判断を示し、聞き手にその最終判断を任せることを意味する、としている。また終助詞「な」の用法は、話し手の性差が大きく影響するとして、「な」は独言の場合は女性にも用いられるが、それ以外の「な」は男性専用の終助詞であるとしている。

またマグロイン・花岡(1997)は、次のようなレイノルズズ²⁾の分類を引用している。

断定(Declarative)	確認(Confirmative)
ぞ	
ぜ/さ	な
よ	
わ	ね

ここで表の上にあるほど主張度が強いという。またこれらの終助詞のうち女性が使えるのは、表中下のほうに位置する助詞、つまり「よ」「わ」「ね」のように主張度の低いものである。「女性は社会的に男性より低い立場にあるので、自己の主張を強く相手に押しつけるような表現は使えないのである。」³⁾としている。

以上から「な」と「ね」についていくつかの特徴が見出されよう。

- 1) 「な」には聞き手をめあてとした用法と、独言のように聞き手をめあてとしない用法とがある(本稿では森山新(1998)に引き続き、これらを「聞き手めあて」「聞き手不めあて」の用法と呼ぶことにする)。
- 2) 「ね」は男女とも用いるが、「な」は「聞き手めあて」の用法では男性のみが、「聞き手不めあて」の用法では男女ともが用いる。
- 3) 「な」と「ね」はともに確認の終助詞であるが、「な」は主張度が強く、「ね」は主張度が弱い。

2) マグロイン・花岡(1997)「終助詞」「女性語の世界」、p.34.

また森山新(1998)によれば、「な」と「ね」の間には、

1) 「ね」は「聞き手めあて」の終助詞であるのに対し、「な」は「聞き手めあて」の用法、「聞き手不めあて」の用法、そしてその中間型の用法(表見的には「聞き手不めあて」のように話されるが、話し手の気持ちとしては「聞き手めあて」に話される用法)がある。

「聞き手めあて」「聞き手不めあて」「中間型」の用法とは、以下のような用法を指す。

(5)、(6)が「聞き手めあて」、(7)、(8)が「聞き手不めあて」、(9)、(10)が中間型の例である。(9)では、「見られちゃったんですね」では、「聞き手めあて」に確認がなされており、終助詞も「聞き手めあて」の「ね」が用いられているが、後半の「私、はずかしいな。」は、実際には「聞き手をめあて」としながらも、表現上は初対面の相手ということもあり、独言のように語られていて、終助詞も「な」が用いられている。従って、心の内面では「聞き手めあて」であるが、表現上は「聞き手不めあて」となっている。同様に(10)でも、話し手のさとみは気持ちとしては「聞き手めあて」に憤慨を吐露しているが、表現上は初対面の相手への配慮から、独言的な表現となっている。このように一言で「聞き手めあて」とも「聞き手不めあて」とも言い難いものを「中間型」とした。

(5) 君もやってくれるだろうな。(新明解)

(6) 遅れないで来いよな。(新明解)

(7) 急げば間に合うな。(新明解)

(8) 待ってくれるかな。(新明解)

(9) さとみ「見られちゃったんですね、私、はずかしいな。」(若者のすべて)

(10) さとみ「医大に入っている人に、そんなこと言われたくないな。」(若者のすべて)

2) 「聞き手めあて」の用法では「な」は「ね」に比べて聞き手の意向や知識を、話し手のそれに一致「させよう」とする傾向(一致強要型)が強く、話し手優先であり、聞き手への気配りは「な」のほうが「ね」よりも少ない。

3) 「な」は「聞き手めあて」の用法では女性はあまり使わないが、「聞き手不めあて」の用法や中間型の用法では女性も用いる。

といった違いが指摘されている。

ところがマグロイン・花岡(1997)や森山新(1998)では、終助詞「な」と「ね」の意味・用法の違いが根本的に何に起因しているかが明らかにはされていない。

3. 「な」と「ね」の意味・用法

3.1. 「な」と「ね」の意味

現代語の「な」と「ね」の意味について、辞書や辞典では以下のように示されている³⁾。

3) 松村明編(1971)『日本文法大辞典』を引用した(引用中、用例は省略した)。このほか見坊豪紀他共編(1981)『新明解国語辞典(第3版)』や鈴木一彦・林巨樹共編(1985)『研究資料日本文法 第7巻 助辞編(三) 助詞・助動詞辞典』なども参照したが、その中でも『日本文法大辞典』を本稿で引用したのは、他の辞書や辞典の説明に比べ、「な」と「ね」の違いが

「な」[意味]①感動や詠嘆を表わす。②願望を表わす。③軽く断定したり主張したりする気持ちを表わす。④同意を求めたり、返答を誘ったりする。⑤敬語の命令形につき、命令を和らげる。

[補説]①～④の意味で使うのは、男。⑤は女。男の「な」は、あまり目上には使わない。女の「な」も親愛を表わすので、あらたまるところでは使わない。現代では、いずれも文章には使わない。

「ね」[意味]①聞き手にたずねようとする気持ちを表わす。「か」につくことが多い。②自分の発言内容に同意を求めたり、そうかそうではないかの返答を求めたりする。③軽く主張する気持ちを表わす。④念を押す。⑤(聞き手の同意を求めながら)軽い感動を表わす。▷感動の終助詞の中では最も待遇的に高く、「ごさいますね」などを使うことができる。しかし、文章には普通使わない。

これをみればわかるように辞書や辞典では「な」と「ね」の意味について、男女の性差や丁寧さ、話し手が表そうとしている気持ちなどで説明がなされているが、その違いについてはあまり明確とは言い難い。

3.2. 「な」と「ね」の3つの用法

森山新(1998)において、終助詞「な」には3つの用法があることを示したが、本稿では「な」と「ね」の用法の違いを明らかにするために、この立場を「ね」にも拡張してみたい。

本稿がめざしているのは、終助詞「な」と「ね」の意味・用法の違いが根本的に何に起因しているかを明らかにすることである。本稿では資料として、漫画本「陽あたり良好」第1巻(小学館発行)を用いた。漫画本を用いた理由は、丁寧体よりも普通体が多く、その分終助詞も多く使われるであろうと推測されること、漫画本には心の中での独言、つまり「聞き手不めあて」のせりふも書かれていることなどが理由である。結果は以下の表1の通りである。なお、今回は終助詞の用法のみを取り上げ、間投助詞の用法は除外した。また森山新(1998)の「中間型」は「中間的用法」とした。それは終助詞「な」のみならず「ね」をも扱うにあたり、両者の「中間型」には大きな違いがあり、その違いを無視して「中間“型”」としてまとめることは曖昧かつ不適切であり、問題があると思われたからである。中間的用法に属する「な」と「ね」の例を以下(11)、(12)に示す。例文(11)は前述した通り。例文(12)では、かすみの質問に対し、おばが答える場面だが、答えが明確にはわからず、独言になってしまっている。もし聞き手をめあてとした発話であるなら、「勇作くんよ、きっと。」となるはずだからである。「勇作くんね」の「ね」の確認の相手は、聞き手かすみではなく、話し手のおば自身(の記憶)である。このように中間的用法では、心の内面と表現とが逆になっている。

(11) さとみ「医大に入っている人に、そんなこと言われたくないな。」(若者のすべて)

(12) おば「...あの男? あっ勇作くんね、きっと。」(陽あたり良好:句読点筆者)

すなわち「な」の中間的用法は、心の内面においては「聞き手めあて」であるが、表現においては独言、つまり「聞き手不めあて」のように語られている。一方「ね」の中間的用法は、表現上では「聞き手めあて」であるが、心の内面では独言、つまり「聞き手不めあて」的である。つまり内面と外面上の表現と

の関係が「な」と「ね」では全く正反対となっている。こうした違いを考慮して、本稿では中間型とはせずに、単に中間的用法としておく⁴⁾。

さらに終助詞「な」を扱うにあたってよく問題となる以下の2点について予め簡単に断っておきたい。

まず第一に、「かな」をどう扱うかという問題である。「かな」は「かしら」とともに一つの終助詞として扱われる場合も多い。ところが「かな」「かね」は次の例文(13)と(14)、(15)と(16)の対比が示すように、終助詞「な」「ね」と同じような意味・用法的な対比を見いだすことができるため、ここでは「かな」「かね」も「な」と「ね」の違いを明らかにしてくれるものと考え、とりあえず本稿では「かな」「かね」をそれぞれ「か」に「な」や「ね」がついたものと考えことにしたい。

(13) あした、彼も行くかな。

(14) あした、彼も行くかね。

(15) あした、きっと彼も行くな。

(16) あした、きっと彼も行くね。

第二に「な」と「なあ」、「ね」と「ねえ」を区別するかどうかの問題である。「な」と「なあ」、「ね」と「ねえ」の間にはもちろん意味・用法に違いがある。ところが本稿では「な」と「なあ」の違いや「ね」と「ねえ」の意味・用法の違いに言及しようとしているのではなく、「な」と「ね」の意味・用法の違いについて言及することを目的としている。その意味では上記の「かな」「かね」と同じく、「なあ」と「ねえ」もまた「な」と「ね」と同じような意味・用法の対比を見出せるため(例文(17)と(18)を参照)、ここではやはり「なあ」「ねえ」をそれぞれ「な」「ね」に含めるものとする。

(17) きれいな夕焼けだな(あ)。

(18) きれいな夕焼けだね(え)。

表1を見れば、終助詞「な」と「ね」の意味・用法の違いがよく示されている。ここで使用回数の合計は男性が68、女性が69とほぼ同数であるから、各項目の男女の数を単純に比較して、男女どちらに多く用いられるかを判断してもよさそうである。例えば「聞き手めあて」の「ね」は男性が23、女性が40であるから、男性よりは女性に多く用いられるなどいえそうである。

この表1を見れば次のようなことが確認できるだろう。

表1 終助詞「な」と「ね」の使用回数(左が男性、右が女性の数を示す)

	聞き手めあて	聞き手めあて	中間的用法	合計
な	14/1	12/10	19/11	45/22
ね	23/40	0/4	0/3	23/47
合計	37/41	12/14	19/14	68/69

註) 森山新(1998)では、「中間型」としたが、ここでは中間的用法とした。

4) 但し「な」の中間的用法は、本稿において非常に重要な考察の対象となっており、後半部ではこれを「隔ての用法」としている。

- 1) 「ね」は男性より女性に多く用いられている(男23/女47)が、「な」は女性より男性に多く用いられている(男45/女22)。
- 2) 「な」は「聞き手めあて」の場合には、ほとんどが男性に用いられる(男14/女1)が、それ以外では女性にも用いられている(男31/女21)。
- 3) 「ね」はほとんどが「聞き手めあて」の用法である(全体70例中63例)が、「な」はむしろ「聞き手めあて」や中間的用法が多い(全体67例中52例)。

これらについては、森山新(1998)においても似たようなことが確認されている。以下の表2を参照願いたい。相違点といえば、3)で「な」が「聞き手めあて」や「中間的用法」よりも「聞き手めあて」の用法のほうが多いことぐらいである。これは総数を見ればわかるようにドラマ『若者のすべて』では男性の発言が女性の発言の2倍近くあり、今回の調査のように単純に男女の数値を比較できないことや、男性が用いた「聞き手めあて」の使用回数が際だって多いことなどが、単純な比較を困難にしている。実際、終助詞「な」の男性の使用回数は登場人物の男性が京浜地区の育ちで言葉遣いがかかなり乱暴なために「聞き手めあて」の用法に集中しているが、女性の使用回数だけを見れば、「聞き手めあて」の用法が3回だけであるのに対し、「聞き手めあて」と中間的用法の合計は24例にもなり、終助詞「な」が一般的には「聞き手めあて」よりも「聞き手めあて」や中間的用法に用いられがちであることを示唆している。

表2 終助詞「な」と「ね」の使用回数(左が男性、右が女性の数を示す)。

	聞き手めあて	聞き手めあて	中間的用法	合計
な	79/3	7/7	19/17	105/27
ね	34/62	0/0	0/0	34/62
合計	113/65	7/7	19/17	139/89

註) フジテレビ系ドラマ『若者のすべて』第1～5話までを集計したもの(森山新:1998)。

森山新(1998)では明らかにならなかったこととして、ここで特に注目しておかなければならないことは、表1に示されているように「ね」にも若干ながら「聞き手めあて」の用法や、中間的用法があるという事実、そしてそれらが女性に集中しているという事実である。上述したように今回の調査で用いたのは漫画本である。漫画本は独言も表記されている。そのため日頃は耳にすることのない独言的な「聞き手めあて」の用法や独言的な要素を多分に持っている中間的用法が確認されたものと思われる。

(19) かすみ「くそォ...こわいなァ。し、しかし女の子だもんネ。」(陽あたり良好:句説点筆者)

(20) おば「...あの男? あっ男作くんね、きっと。」(陽あたり良好:句説点筆者)

(19)は「聞き手めあて」、(20)は中間的用法である。(19)は、同じ高校内の暴力団の組長を前に、かすみ語る独言である。(20)については前述の通り。これまで「ね」は相手に対する確認、または最終判断を相手に任せるといった用法のみが取り扱われてきた。言いかえれば「聞き手めあて」の用法の

みを取り扱われてきたのである。しかしながらわずかとはいえ、「聞き手不めあて」の用法や中間的用法が存在するという事は注目に値する。またそれがなぜ女性に好まれて用いられるのであろうか。ここに「な」と「ね」の用法を区別する重要な鍵が潜んでいるように思われる。

4. 「な」と「ね」の意味・用法の違い

4.1. 聞き手めあての程度の違い

まず「な」と「ね」を比べてみると、同様にそれぞれ「聞き手めあて」「聞き手不めあて」「中間的」の3つの用法が存在している。そして「ね」は女性に多く、「な」は男性に(圧倒的に)多く用いられている。辞書を見ても、性差は両者の用法の違いとして明確に感じられる。それでは両者の違いは性差に帰着されるのであろうか。

上述したように「ね」は「聞き手めあて」の用法が圧倒的であるのに対し、「な」はむしろ「聞き手不めあて」の用法や中間的用法が多い。中間的用法の「な」は上述のように心の中では聞き手を意識しているが表現上は独言である、言い換えれば聞き手に聞こえるように独言をいうという表現であるから、表現としては「聞き手不めあて」の用法に属すると考えられる。だとすれば「な」は「聞き手不めあて」の用法のほうが圧倒的に多くなる(67例中52例)。

つまり「な」と「ね」の用法は性差によるのではなく、むしろ「聞き手めあて」かどうかにより根本的な用法の違いを見出すことができると考えられる。具体的に言えば「ね」は「聞き手めあて」の用法が本来的な用法(無標)であり、「聞き手不めあて」の用法は派生的な用法(有標)であるのに対し、「な」は「聞き手不めあて」の用法が本来的な用法(無標)であり、「聞き手めあて」の用法は派生的な用法(有標)であるということができそうである。「な」と「ね」に見られる用法の性差は、こうした「聞き手めあて」の程度から二次的に派生したものと考えられる⁵⁾。

鈴木(1997)によれば、聞き手に関わる事柄について、話し手が決定権を保持する発話はすべて男性的となるのに対し、聞き手への丁寧さに対する配慮を持ち、聞き手の領域に踏み込まず、決定権を話し手の事柄に限った発話は女性語となるという。すなわち男性は聞き手を無視して話し手のみが決定権を有する形式を男性語として選択し、その結果本来は「聞き手不めあて」の終助詞である「な」を「聞き手めあて」の用法として用い、一方女性は聞き手への丁寧さに対する配慮を持つ形式を女性語として選択し、その結果もとから「聞き手めあて」の終助詞である「ね」を「聞き手めあて」の用法として用いるものと思われる。また「聞き手不めあて」の場合には、女性でも「な」を用いることができるのも、独言では聞き手への配慮が重要でなくなることで説明ができる。

また男性の独言に比べ、女性の独言は心の中にもう一人の自分を想定し、そのもう一人の自分を

5) 森山卓郎(1989)では、終助詞ナアが聞き手めあてでないこと、話し手限りの発話であることが若干ながら言及されている(p.102)。また金水(1993)でも注(2)において「聞き手が必要かどうかという点を除けば、ネとナは意味的に等価である。」(p.121)と述べ、若干ながら「な」と「ね」の「聞き手めあて」性の程度について言及している。しかし本来的な用法が「ね」では「聞き手めあて」であり、「な」では「聞き手不めあて」であるとは見なされていない。

「めあて」として独言を言う場合があり、それが女性の「聞き手めあて」の「ね」の用法になったものと思われる。つまり男性は相手がいる場合にも相手を無視して独言のように話し、女性は相手がいなくても相手がいるかのように話す傾向があり、こうした男女の特性と終助詞の「聞き手めあて」性とが相互に牽引しあって、用法の性差が生まれたと考えられる。

4.2. 気配りや丁寧さの違い

次に「な」と「ね」の中間的用法について述べてみたい。上述したように中間的な「な」の用法とは、心の内面においては「聞き手めあて」に用いられているが、表現においては「聞き手めあて」的な用法である。一方の「ね」は、逆に表現上では「聞き手めあて」であるが、心の内面では独言、つまり「聞き手めあて」的である。つまり表3のようになる。

表3 「な」と「ね」の中間的用法

	表現	話し手の心の内面
な	聞き手めあて	聞き手めあて
ね	聞き手めあて	聞き手めあて

つまり「な」も「ね」も心の内面と表現とが一致せず、逆になっている。従ってこうした用法を明らかにしていくために、ここでは終助詞で示された表現上の「丁寧さ」と、話し手の心の内面にある「気配り」とを分けて考えることにする。一般に「丁寧さ」と「気配り」とは似たような意味で用いられることが多いが、ここでは以下のように区別して定義することにする。

- ・ 気配り：話し手の聞き手への内的で非言語的な顧慮。
- ・ 丁寧さ：(話し手の聞き手への内的な顧慮が)言語的な表現として現れたもの。

この定義によれば、一般的には「丁寧さ」は「気配り」に裏付けられている。言い換えれば内面における「気配り」が増せば、それに比例して表現上の「丁寧さ」も増すのが普通である。

4.2.1. 「聞き手めあて」の程度と「丁寧さ・気配り」との関係

まず「な」「ね」の「聞き手めあて」の程度と「丁寧さ・気配り」との関係について見ていきたい。

図1は「な」と「ね」の「聞き手めあて性」と「丁寧さ・気配り」との関係を示したものである。図中X軸は「聞き手めあて性」を示し、X軸の「0」は「聞き手めあて性 X=0」すなわち「聞き手めあて」を示し、「X = +1」は「話し手以外にもう一人、聞き手を談話に加えたこと」、すなわち「聞き手めあて」を意味している。「聞き手めあて性」が0から+1になるにつれて、「丁寧さ・気配り」(Y軸)も、0から+1へと増大するのが普通である。

「な」は本来の用法が「聞き手めあて」(「な(2)」)であり、その際、「丁寧さ・気配り」は有しない(Y = 0)。従って「な」の本来の座標(「な(2)」)は(0, 0)である。また「な(1)」はこれを「聞き手めあて」に用

いたものだから、その座標は「丁寧さ・気配り」は変わらず($Y=0$)、「聞き手めあて性」だけが+1となるから、(+1, 0)となる。

「ね」は本来の用法が「聞き手めあて」(「ね(1)」)であり、その際、「丁寧さ・気配り」を有している($Y=+1$)。従って「ね」の本来の座標(「ね(1)」)は(+1, +1)、また「ね(2)」はこれを「聞き手めあて」に用いたものだから、その座標は「丁寧さ・気配り」は変わらず($Y=+1$)、「聞き手めあて性」だけが0になるから、(0, +1)となる。

この図から、「な(1)」は「聞き手めあて」としては、「丁寧さ・気配り」が本来 $Y=+1$ であるべきが0であるため-1(気配りと丁寧さの不足)であり、逆に「ね(2)」は「聞き手めあて」としては、「丁寧さ・気配り」が本来 $Y=0$ でよいところを+1となっており「+1」(気配りと丁寧さの過剰)であることがわかる。

この図からわかることは、対角線よりも右下、すなわち「丁寧さ・気配り」が不足している領域に属するものは、男性語として用いられ、逆に対角線の左上、すなわち「丁寧さ・気配り」とが過剰な領域に属するものは女性語として用いられるということである。対角線上は本来の用法と言えるものであり、その意味で「丁寧さ・気配り」も過不足がない。同時に男性語と女性語の重なる部分をも形成している。つまり図で右下に行くほど男性語としての性質が強くなり、対角線上は男女共に用いられるもの、そして左上に行くほど女性語化すると言えそうである。「聞き手めあて」と「丁寧さ・気配り」との関係で言えば、「聞き手めあて」の程度に見合う以上の「丁寧さ・気配り」があれば、それは女性語らしくなり、逆に「丁寧さ・気配り」が「聞き手めあて」の程度に見合わない場合には、男性語化していく。「聞き手めあて」の程度にちょうどふさわしい「丁寧さ・気配り」を備えているものは、男性女性を問わず、だれもが用いることができる表現となる、ということである。

図1 「な」と「ね」の「聞き手めあて性」と「丁寧さ・気配り」との関係

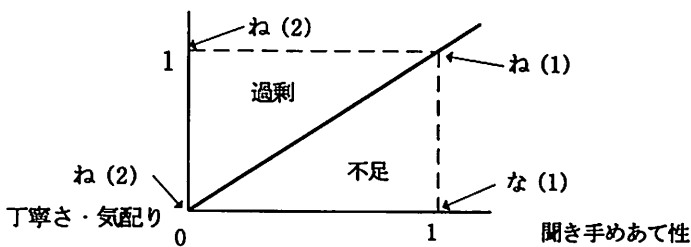


表4 「な」と「ね」の「聞き手めあて性」と「丁寧さ・気配り」との関係

	聞き手めあて性	丁寧さ・気配り
な(1)	+1	0
な(2)	0	0
ね(1)	+1	+1
ね(2)	0	+1

4.2.2. 「丁寧さ」「気配り」と各用法との関係

次に「丁寧さ」「気配り」と「な」や「ね」の各用法との関係について考えてみたい。表5は「な」と「ね」の各用法についてその表現上の「丁寧さ」や内面の「気配り」との関係を示したものである。

表5 「丁寧さ」「気配り」と各用法との関係

	丁寧さ	気配り	意味・用法
な(1)	(0)	(0)	丁寧さ・気配りの不足(+1→0)は「な」を男性語化する
な(2)	0	0	本来の用法(聞き手めあて性=丁寧さ=気配り=0)
な(3)	0	+1+ α	隔ての用法
ね(1)	+1	+1	本来の用法(聞き手めあて性=丁寧さ=気配り=1)
ね(2)	(+1)	(+1)	丁寧さ・気配りの過剰(0→+1)は「ね」を女性語化する
ね(3)	+1	+1- α	丁寧さに比べ、気配りが不足している

まず「ね」は本来「聞き手めあて」の終助詞であり、話し手の聞き手への「気配り」に裏付けられながら、表現上の「丁寧さ」を持ち合わせる。これは表中「丁寧さ=+1」「気配り=+1」で示されている。

「ね(1)」は「聞き手めあて」の「ね」の本来の用法であり、従って上述のように聞き手への「気配り」に裏付けられた「丁寧さ」を有している。

ところが「ね(2)」は本来「聞き手めあて」の終助詞が「聞き手不めあて」に用いられた用法で、本来存在すべき聞き手がいないわけだから「丁寧さ」も「気配り」も不要である。従って本来的に「ね」が有している「丁寧さ」やその背後に存在するはずの「気配り」が、浮いたもの、意味のないものとなってしまっている。しかしそれが例文(21)に表れているように、「女性らしい愛らしい表現」を作り出している。言いかえれば、本来「聞き手めあて」の「丁寧さ」や「気配り」が「女性らしさ」に転化しているのである。表中ではそれが(+1)で示されている。

(21) かすみ「くそ...こわいなア。し、しかし女の子だもんネ。」(陽あたり良好)

「ね(3)」は「ね」の中間的用法であるが、例文(22)のように「ね」が本来持っている表現上の「丁寧さ」は維持しているものの、話し手の意識が「ね」本来の「聞き手めあて」(+1)となりきれておらず、その分聞き手への「気配り」が若干(α)欠如している(+1- α)と感じさせる。例えば、かすみの質問に対するお婆の答えとして発せられた例文(20)では、かすみへの「気配り」が薄れ、一人考え込みながらの独言的な発話となってしまっている。聞き手とすれば、自分への答えを待っているのに、それが独言になってしまったのだから、話し手に対し、何となく「気配りの欠如」を感じることであろう。

(22) お婆「...あの男? あつ勇作くんね、きつと。」(陽あたり良好)

これに対し「な」は本来が「聞き手不めあて」の終助詞であるため、聞き手への内的な「気配り」も、表現上の「丁寧さ」も本来持ち合わせていない。従って表中ではこれらが「丁寧さ=0」「気配り=0」で表

されている。

「な(1)」は「聞き手めあて」の「な」であるが、本来「聞き手めあて」の終助詞のため、それを「聞き手めあて」に用いた場合、聞き手に対して「丁寧さ」も「気配り」もない表現になってしまうのは当然である。その結果「な(1)」が聞き手を無視しているように聞こえたり、自己主張の強い「押し付け型の確認(一致強要型)」のようになつたりするのである。その結果この用法は男性に多く用いられ、女性にはあまり用いられないものとなる。

「な(2)」は「聞き手めあて」の「な」であるが、これは本来的な用法であり、「聞き手をめあて」としているため、「丁寧さ」も「気配り」も必要ない、ごく自然な言い方となっている。そのため男性のみならず女性も用いることができる。

問題は「な(3)」である。これは心の中では聞き手に気を配り、聞き手をめあてとしながら、表現上は「聞き手めあて」の用法を用いている場合である。つまり表現上は独言であり、表現上の「丁寧さ」も存在しない(丁寧さ=0)が、心の中では聞き手に対する「気配り」が明らかに存在している(気配り=+1)。そしてさらにいえば、わざわざ聞き手がいるにもかかわらず、独言のように言うところ、言わなければならないところにも「特別な気配り(+ α)」が施されているのである。つまりこの場合の「気配り」は合わせて「+1+ α 」となり、他の場合よりも内面の「気配り」が多くなっている。

4.2.3. 終助詞「な」の「隔ての用法」

ではなぜこのように、心の中では「聞き手めあて」としながら、表現上は「聞き手めあて」、つまり独言のように表現しているのでしょうか。またなぜそれほどまでに多くの「気配り」をしなければならぬのでしょうか。そこには「聞き手めあて」の表現をしなければならない状況であるにもかかわらず、それができない、何らかの理由がある。

その理由とは、「聞き手との心的距離が遠く、聞き手に直接同意や確認を得ることに抵抗を感じる」というものである。これは相手がまだ親しくない場合(例(23)では千鶴子が未だ相手にもされない武志に対する発話であり、千鶴子は武志の顔色を窺いつつ話している。例(24)はさとみが初対面の圭介に自分の憤慨を吐露しているものだが、初対面であるが故に憤慨をストレートに相手にぶつけることが躊躇されている。)や、内向的で人間関係が上手でなく、相手の意向を単刀直入に聞くことができない場合(例(25)は内向的な圭介の発話。圭介はこうした性格上、「ね」を用いるべきところに「な」を用いることが多い。)や、相手からどんな反応が返ってくるかがはっきりせず、不安を感じながら話す場合(例(26)の発話は事実上薫へのプロポーズであり、薫の顔色を窺いながらの発話となっている。)などは、とりあえず自分の意向を表明してみるといった形で表現の上では「聞き手めあて」の表現となるのである。

(23) 千鶴子「うらやましいな、その犬。」(若者のすべて)

(24) さとみ「医大に入っている人に、そんなこと言われたくないな。」(若者のすべて)

(25) 圭介「もうこの分だと5浪も確実かな、なんて。ちょっぴり自慢です。」(若者のすべて)

(26) 堀「そのうち案内してほしいな。ご両親のお宅にも伺いたいし。」(若者のすべて)

これらの「気配り」は、本来なら「聞き手めあて」の表現を使うべきところを、敢えて相手の心中に踏み込むまいとして「聞き手不めあて」の表現を使ったわけであるから、そうした内的な「気配り」が「+ α 」となり、「聞き手めあて」の表現を使った場合以上の「気配り(+1+ α)」が施されることになるのである。

このように逆に「な」を使うことで、より多くの「気配り」を示すこともあるといえそうである。これは敬語の用法に、心中の敬意をその如く示す丁寧の用法のほか、未だ心的距離の遠いソトの人に示される丁寧の用法があるのと似ている。日本語の敬語(丁寧語も含む)には、それを用いることによって聞き手との距離を保つ働きがあり、これを「隔て」の敬語と呼ぶ。すなわち「隔て」の敬語用法において「丁寧さ」と「隔て」とは表裏一体となり、「隔て」はソトの人に対する丁寧表現となるのである。これと同じように終助詞の使用においても、親しい人、ウチの人との間では「ね」を使って直接的に「普通の気配り(+1)」をその如くありのままに示し、未だ親しくない人、ソトの人に対しては、相手の心中にむやみに入り込むことによる失礼を避ける意味から、「隔て」のない「ね」のかわりに、「隔て」のある「な」を用い、「特別な気配り(+1+ α)」を示しているのである。従って「な」のこのような中間的用法を「隔ての用法」と名付けることにする。以下の2つの例文を比較すれば、「隔て」の「な」が使われている後者(例文(28))のほうが「気配り」がある表現となっていることは明らかであろう。

(27) (どんな食事がいいかを尋ねられて)私は洋食がいいね。

(28) (どんな食事がいいかを尋ねられて)私は洋食がいいな。

このように「な」には「ね」にはない「隔ての用法」があることがわかった。言いかえれば「隔ての用法」で用いられるときには、「な」のほうが「ね」よりも「気配り」のある表現となるのである。「オタク族」の増加などに見られるように、個人主義の傾向が進み、人間関係に距離を置きがちな今日の社会においては、こうした「隔ての用法」を用いた「特別な気配り」が必要となる場合が多くなってきており、また少子化から性格的に個人主義的傾向の強い人(「特別な気配り」を使いがちの人)の増加などもあいまって、「隔て」の「な」の使用は今後ともますます増えていくように思われる。

今回終助詞「な」や「ね」の意味・用法、とりわけ「な」の「隔ての用法」を明らかにするにあたって、聞き手への内的な「気配り」と、表現上の外的な「丁寧さ」とを分けて取り扱った。こうした捉え方は、言外の意味を扱う語用論においてはたびたび用いられるものであり、それを今回終助詞の意味・用法の研究に応用したものである。

例えば、部屋が暑いので、冷房でも入れて欲しい、という場合に、聞き手が親しいウチの人であれば、

(29) ちょっと冷房入れてくれよ。

とでも言い、自分の内的な考えをそのまま表現に表すことが可能である。ところが、聞き手が未だ親しくないソトの人である場合には、直接的な要求や依頼の表現は避けられ、例文(30)のようなその場の状況説明的な表現となるであろう。

(30) このへや、ちょっと暑いですね。

この例に明らかなように、ウチの人に対しては、内面と表現とを一致させることにさほどの抵抗は感じないが、ソトの人に対しては、内面の気持ちと表現とは必ずしも一致したものとはならないことが多い。こうした表現の手法はG.N.リーチ(1983)の言語伝達を円滑にするための「丁寧さの原則」⁶⁾に基づくものである。

リーチによれば、「丁寧さの原則」とは、語用論においてH.P.グライス(1967)の「協調の原則」と相補関係をなすという。特に「丁寧さの原則」は、ソトの人との言語伝達において重要となる。ウチの人との関係においては「協調の原則」の4つの公理(質の公理、量の公理、関係の公理、様態の公理)に基づいた明確な言語伝達が行われることが多いが、ソトの人との言語伝達においては、「協調の原則」には取反し、「丁寧さ」をますために「丁寧さの原則」を用い、話し手の真意は「言外の意味」として表現されることになる。

終助詞「な」の「隔ての用法」にもこうした「丁寧さの原則」を見てとることができる。ウチの人との関係においては「聞き手めあて」の「ね」を用いて直接同意や確認を求め、明確な言語伝達となされることが多いが、ソトの人との関係においては、直接的な同意や確認を求めず独言として表明される。これは「明確な言語伝達」をめざす「協調の原則」よりも、丁寧さをますための「丁寧さの原則」を用いているのである。つまり「な」の「隔ての用法」では、「明確な言語伝達」をめざす以上に「ね」を用いた際に起こりうる意見の対立を事前に回避したいという心理から「丁寧さの原則」が作用しているのである。そして「隔て」の「な」使用にあたっては「丁寧さの原則」の中でも、特に相手との意見の対立を最小とし、一致を最大にしたいという「同意の公理」や、自己と他者との間の反感を最小とし、同感を最大とする「同感の公理」などが作用していると見ることができよう。そのようにしながらソトの人に対する人間関係を円滑にしようとしているのである。

また、「隔て」の「な」の使用はR.レイコフ(1974)の提示する「選択性の規則」にもかなっている。レイコフによれば、聞き手に選択の余地を残すほど丁寧な印象が強まるという。終助詞の場合でいえば、直接同意や確認を求める「ね」よりも「隔て」を置いた「な」のほうが、聞き手の選択の幅は広くなり、それだけ相手に対し丁寧な表現となるのである。例文(28)が(27)よりも丁寧に感じられる理由もここにある。

このように「隔て」の「な」では、表現(言内の意味)と真意(言外の意味)とが異なるため、語用論的なアプローチを行うことが必要であり、こうしたアプローチをしない限り「隔て」の「な」の意味・用法を明らかにすることはできないと思われる。

5. まとめ

以上、終助詞「な」と「ね」の用法の違いについて考察してきた。本稿で新たに明らかになったことを

6) ここでいう「丁寧さ」は、本稿で言う単なる表現上の「丁寧さ」ではなく、内的な「気配り」に裏付けられた丁寧さを意味するものと思われる。

まとめれば、

- 1) これまで「な」と「ね」は、性差の違いが強調されることが多かったが、より重要なのは両者の「聞き手めあて」の程度の違いである。「ね」は本来「聞き手めあて」をその用法の本質としているのに対し、「な」は本来「聞き手不めあて」をその用法の本質としている。
- 2) 「な」と「ね」の間に見られる用法の性差は、「聞き手めあて」の程度の差が、男女の性格的特性と結びついて生じた二次的なものである。すなわち「な」が本来的に持っている「聞き手不めあて」性が男性の性格に好まれ、一方「ね」が本来的に持っている「聞き手めあて」性が女性の性格に好まれて、それぞれ男性語化、女性語化したのである。
- 3) 用法の性差は「聞き手めあて」の程度と「丁寧さ・気配り」との関係で決定される。すなわち「聞き手めあて」の程度に対して「丁寧さ・気配り」が不足すれば男性語化し(「聞き手めあて」の「な」、過剰ならば女性語化する(「聞き手不めあて」の「ね」)。「丁寧さ・気配り」が「聞き手めあて」の程度に対して過不足なく適当な場合には、男女ともに用いることが可能である(「聞き手不めあて」の「な」や「聞き手めあて」の「ね」)。
- 4) 「な」には内面では「聞き手めあて」としながらも、表現上では「聞き手不めあて」のように語られる用法があり、これを「隔ての用法」と呼んだ。「な」の「隔ての用法」では「ね」の「聞き手めあて」の用法よりも多くの気配りが示される。

また今回終助詞「な」と「ね」の意味・用法を明らかにするにあたって、G.N.リーチ(1983)の「丁寧さの原則」やH.P.グライス(1967)の「協調の原則」、さらにはR.レイコフ(1974)の「選択性の規則」といった語用論的な考え方をういてみたが、未だ親しくないソトの人との関係などで用いられる「な」の「隔ての用法」などを明らかにする上で、こうした捉え方は有効性を発揮したと思われる。終助詞を含め、モダリティーの研究に際しては、今後こうしたアプローチも必要であろう。

本研究のそもそもの目的は、中上級日本語学習者に終助詞を如何に教えるかという教育的なものであった。学習者の学習段階が進むにつれ、文体は丁寧体のみならず、普通体の使用が始まり、終助詞の習得も必要となるが、学習者にとって終助詞の習得は容易なものではない。これまでの終助詞研究では「ね」や「よ」などの研究は多かったが、「ね」と非常に似通っている「な」についての研究は「な」の使用頻度が高いにも関わらずあまりなされてこなかった。辞書を見ても上述した如く両者の明確な違いは見出し難く、先行研究の多くも「な」と「ね」を同類のものとして扱うことが多かった。また「な」を取り扱ったものでも、それは「聞き手めあて」の「な」に焦点が当てられるのみで、それを「聞き手めあて」の「ね」と比較し、前者は男性が、後者は女性が多く用いるといった記述に終わることも多かった。しかし本稿で明らかになったように、終助詞「な」と「ね」の違いは、より根本的には用法の性差よりも「聞き手めあて」の程度に求められるべきであり、また「な」において重要なのは「聞き手めあて」の用法以上に「聞き手不めあて」の用法なのである。さらに「な」を「隔ての用法」として用い、聞き手に対する気配りを増すといった用法に関しては今まであまり言及されてこなかったが、こうした用法は外国人学習者にとっては特に難解であり、より具体的で詳細な研究が必要である。その意味で本研究がその出発点となれば幸いである。

